

平成 21 年 10 月 22 日  
ダム工学会 若手の会  
ミニイベント 配布資料

## 登場人物の略歴

### 青山 士

静岡県豊田村（現在の磐田市）出身。尋常小学校を卒業後に上京。東京府尋常中学校（現在の日比谷高校）、第一高等学校（東京大学の前身の一つ）を経て東京帝国大学工学部土木工学科に進学。

1903 年に大学卒業後、パナマ運河建設工事への参画を志し単身で渡米。住み込みアルバイト、鉄道会社勤務の後、1904 年より測量作業員としてパナマ運河建設工事に携わる。滞米中はガツンダムの設計などを担当したが、アメリカで高まりを見せていた外国人排斥運動の影響でスパイの嫌疑を受け、パナマ運河の完成を見ることなく 1911 年に帰国。

帰国後の 1912 年に内務省へ入省し、土木局東京土木出張所で荒川放水路建設工事に従事。1927 年に内務省土木局新潟土木出張所長として、自在堰の陥没事故により機能停止していた信濃川大河津分水路の改修工事を指揮。

1934 年に内務技監に就任。2 年後に退いた後は、東京市、兵庫県、旧満州国などの嘱託として土木行政・治水事業などを指導。

戦局が厳しくなった昭和 20 年に長野県へ疎開。戦後は静岡県磐田市の実家に戻り、各地の土木事業の技術顧問として活動。

1963 年老衰のため 84 歳で逝去。

西暦	和暦	年齢	略歴
1878	明治 11 年	0	静岡県豊田郡和泉村にて生まれる
1899	明治 32 年	20	東京帝国大学工学部土木工学科入学
1903	明治 36 年	24	卒業後、パナマ運河建設工事を志し単身アメリカへ向け旅立つ、住み込みアルバイトを経て鉄道会社へ勤務
1904	明治 37 年	25	パナマ運河建設事業に測量作業員として従事
1906	明治 39 年	27	パナマ運河ガツンダム建設工事に従事
1911	明治 44 年	32	パナマ運河ガツンダム閘門建設工事が開始するも、外国人排斥運動の影響もあり志し半ばで日本へ帰国
1912	明治 45 年	33	内務省入省、東京土木出張所に勤務、荒川放水路建設工事に従事し岩淵水門の設計・施工の指揮を執る以降多年にわたり荒川の改修に尽力する
1927	昭和 2 年	48	新潟土木出張所長、信濃川大河津分水路改修工事の指揮を執る
1934	昭和 9 年	53	内務技監に就任（2 年後の 1936 年に依願退職）
1935	昭和 10 年	54	社団法人土木学会会長に就任(任期 1 年)
1945	昭和 20 年	64	長野県へ疎開、終戦後は静岡県の実家へ
1963	昭和 38 年	84	逝去

### 宮本 武之輔

愛媛県温泉郡（現在の松山市）出身。13 才のとき故郷を出て、広島、大阪を経て上京する。1910 年東京の錦城中学を卒業、第一高等学校を経て、東京帝国大学工学部土木工学科に進学。

1917 年、東京大学土木工学科を首席で卒業し内務省へ入省。利根川第二期改修事務所、荒川改修事務所に勤務した。その後も本省、信濃川補修事務所主任等を歴任。

1927 年信濃川の大河津自在堰の陥没事故が発生。卓抜した技術がかわれてその復旧工事の設計責任者に抜擢され、わずか 4 年の工期で完成させる。

多忙な業務の合間にはコンクリートに関する研究も行い 1928 年に工学博士となる。1936 年にはそれまでの河川改修等の経験と研究の成果を取りまとめ「治水工学」として発表。さらに、現職兼務のまま東京大学教授（河川工学担当）として、学生の指導にもあたった。

1941 年急性肺炎のため 49 才の若さで逝去。

西暦	和暦	年齢	略歴
1892	明治 25 年	0	愛媛県温泉郡與居島村（現松山市由良町）にて生まれる
1914	大正 3 年	22	東京帝国大学工学部土木工学科入学
1917	大正 6 年	25	東京帝国大学工学部土木工学科卒業 <p>内務省へ入省し東京土木出張所利根川第二期改修事務所安食工場へ配属</p>
1919	大正 8 年	27	東京第一土木出張所へ配属、荒川放水路開削事業小名木川閘門の設計・施工に従事する
1923	大正 12 年	31	関東大震災の調査に携わり「東京横浜再建意見書」を内務大臣に提出
1926	昭和元年	34	日本大学高等工学校において「鉄筋論」の講義を始める
1927	昭和 2 年	35	新潟土木出張所兼務となり、信濃川大河津分水路自在堰陥没の復旧工事の設計を命じられる
1928	昭和 3 年	36	工学博士となる
1931	昭和 6 年	39	信濃川大河津分水路復旧工事完了
1936	昭和 11 年	44	東京帝国大学工学部講師となり河川工学を教える、翌 1937 年に教授となる
1941	昭和 16 年	48	逝去

### 八田 與一

石川県河北郡（現在の金沢市）出身。金沢一中、第四高等学校（金沢大学の前身の一つ）を経て東京帝国大学土木工学科を卒業。

1910 年より台湾総督府内務局土木課に勤務。台湾総督府では当初、上・下水道事業等の衛生事業を担当。その後、発電・かんがい部門に異動し、28 歳の若さで当時着工中であった桃園大圳の水利工事を一任される。

1918 年に嘉南平原の調査を行い、大規模かんがい事業の実現に向けて尽力。1920 年には事業化が認められ、事業費の半分を国が負担し、受益者が「官田溪埤圳組合（後の嘉南大圳組合）」を結成して事業がスタートする。八田は総督府を退職して組合技師となり、1920 年の事業着手から 1930 年の完成に至るまで工事の陣頭指揮にあたった。

嘉南大圳事業が完成した 1930 年に台湾総督府へ復職し、台湾各地の土地改良・発電計画に携わる。

第二次世界大戦中の 1942 年、フィリピンにおいて農業水利事業を計画するよう陸軍から委嘱を受け、総督府勤務の部下 3 名とともにフィリピンへ旅立つ。しかし、乗船した大洋丸が東シナ海で米潜水艦の魚雷攻撃を受け撃沈され戦死。56 才で生涯を閉じる。

西暦	和暦	年齢	略歴
1886	明治 19 年	0	石川県河北郡今町村（現在の金沢市今町）にて生まれる
1907	明治 40 年	21	東京帝国大学工学部土木工学科入学
1910	明治 43 年	24	台湾総督府に土木技手として赴任（1914 年に技師に昇格）
1916	大正 5 年	30	桃園大圳の設計・監督を行う
1918	大正 7 年	32	嘉南平原の調査、かんがい事業の事業化に精力的に取り組む
1920	大正 9 年	34	官田溪埤圳組合（のち嘉南大圳組合に改称）が認可され、事業着工 <p>台湾総督府技師の職を辞し、組合付きの技師となる</p>
1922	大正 11 年	36	烏山頭出張所長に就任、烏山嶺隧道着工(同年、工事中にガス爆発事故が発生し 50 余名の死傷者を出す)
1926	昭和元年	40	烏山頭堰堤の本工事に着手
1929	昭和 4 年	43	烏山嶺隧道竣工
1930	昭和 5 年	44	烏山頭堰堤竣工、組合技師を辞し技術顧問となる。その後、台湾総督府に内務局土木課水理係長として復職
1942	昭和 17	56	フィリピンにおける農業水利計画の立案のための調査を陸軍省より命じられる <p>乗船した大洋丸がアメリカ潜水艦の攻撃を受け沈没、56 歳の生涯を閉じる</p>

※参考資料

土木学会付属土木図書館　土木人物アーカイブス　http://www.jsce.or.jp/library/page/report.shtml

<b>●彼らが生きた時代</b>		<b>●メモ</b>
元号	西暦	主な出来事
明治	1868	元号が慶応から明治に改元
	1877	西南戦争
	1885	内閣制度発足
	1889	大日本帝国憲法制定
	1894	日清戦争開戦
	1895	日清戦争終戦、台湾の割譲を受け統治を開始
	1900	布引五本松ダム完成(日本初のコンクリートダム)
	1901	八幡製鉄所操業開始(日本初の近代製鉄所)
	1903	琵琶湖疏水水路橋完成(日本初のコンクリート橋)
	1904	日露戦争開戦
大正	1908	小樽港北防波堤一期工事完成(日本初のコンクリート防波堤)
	1910	韓国併合
	1914	日本が第一次世界大戦に参戦
昭和	1920	国際連盟成立
	1923	関東大震災が起こる
	1929	世界恐慌
	1931	満州事変
	1936	二・二六事件
	1937	日中戦争が始まる
	1939	第二次世界大戦が始まる
1941	真珠湾攻撃、太平洋戦争が始まる	
1945	第二次世界大戦終戦	